

## 十二縁起と成道との結合の意義

上 野 順 瑛

### 一

釋尊が十二縁起を觀じて成道されたとは阿含經典の記する處である。然し十二縁起の成立は成道時に溯りうるものではなく後代の成立である事は、己に論證された事である。然らば何故に事實に非ざる事を阿含經典は傳えたか。この點より十二縁起と成道との結合の意義を論ずる。釋尊がいかなる法を證して成道されたかは釋尊の證悟の本質を規定するものであり、原始佛教々團の依つて立つ基本となるものであるから、その法は教團にとつて最も重要な法である。故にその法が教團に傳えられておつたならば、後代の成立である十二縁起を成道の法として傳える如き事は起り得ないから、十二縁起を成道の法として傳えるのは歴史的事實としての成道の法は教團に傳えられておらなかつた爲めでなければならぬ。阿含經典に於いて成道に結合された法は十二縁起のみでなく十支、六支、五支の縁起系列の外に多くの種々の教理がある。

成道の法は唯一である可きにも拘らずかく多くの異なる種類の教理が成道に結合されておる事は、歴史的成道の法が傳持されなかつた事を證するものである。この場合にこれら諸種の教理の中で最古の教理を成道の法となし得ないかと云うに、本文批評的に最古の成立の法を設定し得ても、それはこれら諸種の教理中の最古の成立であると云うに過ぎないので、それが成道の法であると云う事ではない。なんと云へば教團が歴史的成道の法でない他の教理を成道の法とすると同一の理由によつて、その教理を成道の法として認めておるからである。然らば何故に後代の成立である十二縁起に成道が結合され、しかもこれが成道の法である事を教團が認めて傳えたか。これは十二縁起の成立は後代であつても、成道の法である。と云う意義を有しておる事を教團が公認した爲めでなければならぬ。その理由は何か。阿含經典の性質の説明として、一説によると釋尊が自らの思想を弟子に語られたものを要約して傳えたものであると云う。この見方によれば成道の法は

其の成道時の釋尊の思想でなければならぬから、後代に成立した教理を成道の法とはなし得ない。又種々の異なる思想體系である教理を共に成道の法となし得る理由もない。然らば阿含經典の性質をいかに解釋すれば上の如き事實を説明し得るか。

十二緣起は常見、斷見、無因論に對する法であると説かれる。この常見斷見無因論は單に觀念的に想定された思想ではなく、その當時現實に原始佛教々團と並び立つていた他の諸教派の教理である。故に十二緣起はこれらの他教派の教理組織が理論的に誤謬であり、又それらが正覺に導くものでない事を論證すると共に、十二緣起は理論的に正しく、又眞の正覺に導く事を論證する教理である。即ち單なる釋尊の體驗の論理的表現である思想ではない。教理なるものは現實に存立する原始佛教々團を、外、他の諸教派に對して論理的に守護するといふ教團的任務を持つた理論組織であると共に、内、佛教々團員に對しては、單に理論的に十二緣起の眞理性を論證するのみでなく、教團員は緣起説の内にある可きを命じ、その外に出づることを禁止するものである。即ち教團員に對して一定の教理的境界線を劃して、その内にある可きことを命ずる教團的任務を有する。ある弟子が識は常住であるとの見を持つた時、諸弟子がそれを惡見として棄つ可きを命じ、釋尊もそれを棄つ可しと命ぜられたと記するのは（大正一、

中阿、二〇一喩帝經、m n 38）、その事が歴史的事實であるか否かとは別に、教理なるものの任務を示しておる。故に教理は佛教々團が成立し他教派との對立が意識されるにいたつて、教團の必要より組織されたものでなければならぬ。

## 二

然らば十二緣起の劃する教理的境界線とはいかなるものか。緣起説並びに常見斷見無因論は、生死の因果と解脱の因果を課題とするもので、論理的には因果の論理的構造の解釋の問題である。即ち常見は自由因果、斷見は必然因果をとり、無因論は必然因果の難點即ち超越的存在を撥無しては、因果は成立しないことを指摘するものである。緣起説の意圖は超越的存在を撥無して必然因果を成立せしめんとするものである。

人間は變化する存在である。生れ老い死す。變化とは時間的に前後する異なる二つのものの同一なる事である。故に變化を理論的に説明するとは、同一なるもの即ち變化せざるものを因とし、異なるもの即ち變化するものを果として説明する事でなければならぬ。常見はこの不變化者を超越的に考え我とした。斷見は經驗的に考えて四大とした。無因論は變化せざるものはそれ自體自己同一性を維持するものであるから、因となつて果を生ずる事も、果となつて因より生ぜられる事

もあり得ないと論じた（大正・二・雜阿・一六二・SN XVIII）。緣起説は常見斷見無因論に對する、因果の論理的構造に關する一つの新しい解釋である。緣起説は常見斷見が共に變化を説明し得ない理由を、我又は四大なる不變化者即ち自己同一性を維持する存在を立て、變化を説明する點にあるとした。故にこの考え方を否定して、變化を存在するものとした。而してこの變化を成立さす爲めの二契機として、不變化的契機と變化的契機とを立てた。具體的に云えば、無明と行があり、この二者の間に、緣つて、と云う關係が生ずるのでなく、無明に緣つて行ありと云う變化過程自體が存在する。この變化過程自體が無明であり、又行である。されば無明と行は一なるものであり、又異なるものである。無明と行が一なることと、異なることは、變化を成立せしめる二つの契機である。されば十二緣起は十二の支を連結したのではない。無明に緣つて行あり乃至生に緣つて死ある十一の變化を連結したものである。

而して緣起の不變化的契機を解脱にあて、變化的契機を生死にあて、この二契機が一なること即ち相即を以つて生死と解脱の關係とした。一と異が、變化の二契機であるから相即し得る。此有故彼有に於いて、此と彼の一なることと異ることとの相即が解脱の本質規定である。この相即が原始佛教の解脱の本質であり、又常見の解脱に異なる點である。生死する

か、解脱するかは、この本質規定を知ると、知らざるとである。生死と解脱が相即するから、生死する人間が解脱しうる。斷見は生死のみを認めて解脱を認めない。常見は解脱を、人の生死よりの分離とした。然し人我は本來生死しない者であるから、生死するものの解脱ではない。十二緣起は生死と解脱を相即するとした。故に生死するものが解脱するとの意義をもち得る。

十二緣起はこの生死と解脱との關係を具體的に圖示する一つの形式にすぎない。十二緣起の本質はこの此有故彼有という抽象的规定自體である。此有故彼有という經文は十二緣起の説明として添えられたものである點より見て、その成立は十二緣起に後れるものであるが、然しそれは十二緣起の含む種々の緣起的關係の本質を抽象的にまとめた規定であるから、年代的に新しい成立であつても、十二緣起の本質規定でありうる。釋尊が十二緣起を順逆に觀して成道されたという經文の意味する處は、十二緣起に具體的に説明された解脱の本質規定即ち此有故彼有なる規定自體を、釋尊の成道とするものである。

### 三

十二緣起を觀じて釋尊が成道し、又凡ての人が解脱しうるという意味は、十二緣起は釋尊の解脱内容を論理的組織とな

して、客觀的な解脱の本質規定を設定し、修道者はこれを追體驗するといふのではない。

無明乃至死の十二縁起は修道者各自の無明乃至死即ち自己の存在規定であるから、これを觀じてその滅を證すといふのも、自己の存在規定を自ら知るのである。これが自らを依とする意味でなければならぬ（大正・二・雜阿・36、SN VII 43）。故にその解脱内容も、その人その人のもつ種々の條件に制約されるもので、精粗深淺の差がある可きである。十二縁起の本質規定である此有故彼有なる規定は、その解脱の境界線即ちその内は佛教の解脱であるが、その外は然らずといふ境界線を示すに過ぎない。この十二縁起なる教理的境界線の全域を覆い、いかなる人の解脱もそれを超え得ない境界線を作すものが、所謂教團の創立者である釋尊の正覺である。十二縁起はかかる意味を有するものとして、教團が成道との結合を公認したものである。十二縁起の成立が後代であり、その作成者が誰であるかに拘らない。十二支に並んで十支六支五支が成道に結合されておるのも、これらの異なる縁起系列が共に指示するものは、此有故彼有といふ解脱の抽象的本質規定であるからである。

凡ての人の解脱が釋尊の解脱を追體驗するのでなく、各自の存在規定を自ら證するのであるから、釋尊の教祖としての意義は、各自が自己の存在規定を自知すれば、解脱しうると

## 十二縁起と成道との結合の意義（上 野）

指示することであつて、釋尊が自己の正覺内容を説くことではない。故に釋尊は自らの成道内容は教團員の解脱の爲めに説く必要はないから、説かれなかつた。これが歴史的成道の法が教團に傳えられなかつた理由でなければならぬ。

十二縁起を成道に結合したのは誰であるか。成道は十二支の外に十支六支五支にも結合されておる。これはそれぞれの縁起系列を信奉した小集團が並び存した爲めであると解しうる。即ちこれらの小集團はそれぞれの縁起系列をその集團員の修道の爲めのテキストとして用いたのである。この考え方によつて縁起系列の成立を考えるとすれば、原始佛教々團の内にはいくつかの小集團が並び存し、それぞれの團員の修道を導くテキストとなす爲めに、已存の縁起系列に若干の修正増補をなした。それが阿含經典に傳はる種々の縁起系列の成立の原因であつたのである。五支六支八支九支十支十一支十二支と次第に支が添加された理由は已に論じた處であるが（印・研、一一ノ二・拙稿）、それは説明的追加や他教理との結合であつて、縁起的境界線の内にあるもので新たに未知の領域を開拓したのではないから、思想的發展として理解すべきものでなく、それぞれの小集團が教化の必要上、説明的に添加したものである。十二縁起もかかる理由によつて作成され、ある小集團がこれを成道に結合し、それが原始佛教々團によつて公認されて、廣く用いられたものである。